

無力

高齢者文学人生論

五木寛之 (1932-)

『無力』(2013)

「新潮新書」

『他力』(1998)

「幻冬舎」

『大河の一滴』

「幻冬舎」

『天命』(2005)

「東京書籍」

もう、そろそろ「力」と訣別するときではないか

五木寛之『無力』を読み、力について愚考してみた。力、力学、首縊りの力学などについて。

もう、そろそろ「力」と訣別するときではないか、と八十三歳の五木寛之はいう。「自力でもなく、他力でもなく、その先に「無力」（むりき）という世界があるのではないか。

自分の中にある自力の要素と、他力を憧れる気持ちとのあいだで揺れ動いている不安定な感覚——それが無力だ。力の束縛をはなれ、自分を真に自在にできるとき、力ではない何か、ほんとうの意味で人間を自由にしてくれると、と五木寛之はいう。

そういわれてみると、たしかにそのように自力と他力とのあいだで揺れ動いている不安定な感覚というものには私の中にもある。それが無力だといわれると、そうかもしれないと思う。これは無力感にうちひしがれてがつくりきたときのみじめな感覚とはちがうようだ。

五木寛之がいう無力は自力や他力と同じく、仏教用語だ。体力や能力の「りよく」でも、力学の「ちから」でもない。どこかで、人のはからいを超えた意味がふくまれているという。

とすれば、これは。ニュートンの万有引力やライプニッツの力学がはたらく世界ではない。法然や親鸞の教えによる仏の世界だ。



無力

高齡者文学人生論

法然は中年にさしかかったところから、痴愚に徹する、知識は全部捨てるといいたした。親鸞は善人なおもて往生す、いわんや悪人をやと言った。智慧と痴愚、善人と悪人との境界をとりはらってしまった聖者のようにもみえる。

そんないかげんなことはないといいたくなるが、行く川の流れはたえずして、しかも元の水にあらずという無常感に共鳴するのが日本人だ。

五木寛之もいかげんで無力な日本人の一人である。金沢で泉鏡花が子どものころ遊んだという神社に行ったとき、テレビスタッフの依頼に応じて、頭を下げ、きちんと礼拝した。やはり日本人としてはそれが自然ですからという。

キリスト教やイスラム教のような一神教の信者なら神社での礼拝は偶像崇拜として抵抗を感じるだろうが、日本人には神仏習合（シンクレティズム）の伝統がある。一軒の家にあたりまえのように神棚と仏壇が置かれている。

ピュアな浄土真宗の立場からは、神祇不拝、つまり自分は神社は拝みません、といって断るところだが、五木寛之は神前で礼拝してしまった。

若いころは貧乏で、血を売ってやっと生活したこともあるが、他力にたすけられながら、八十三歳まで自力で生きた。死ねばまちがいなく無力になるだろうが、今は無力をめざしている。

あかあかやあかあかあかあかやあかあかや

あかあかあかあかやあかあかあかや月

明恵